文化はいかに国境を超えるか
How Culture Transgresses the Borders
在日朝鮮人作家の視点から
From a Resident Korean Novelist's Viewpoint

金 石範
KIM Suok-Buom

基調報告

□ 在日朝鮮人文学

私は専門的なことはお話することはできませんので、最近の体験から在日朝鮮人文学についてお話します。私は在日朝鮮人文学作家のひとりですけれども、在日朝鮮人文学とは何かということを規定するのは難しいのです。2、30 年前と現在の在日朝鮮人文学とはかなり性格が違ってきておりますので、ここでは一般的な意味で、「在日朝鮮人によって作られた文学」とおおまかにお考えていただけたらいいです。

私は 1970 年頃から、在日朝鮮人作家が使っている言葉、つまり日本語について、在日朝鮮人作家が日本語で書くということはどういうことか、作者と言葉のあいだの矛盾、葛藤、もろもろの親和的でないものを何とか解決しなければ自分が書けないということがありまして、一時期よく考え、そしてかなりの評論を書いています。その後は、若い人が在日朝鮮人文学について論ずることもありましたし、私自身『火山島』という大変長い作品に取り組んでおりましたので、在日朝鮮人文学とは何かということについてあまり論じませんでした。

1998 年 10 月 18 日に明治大学で「日韓文学者交流シンポジウム」というのがありました。韓国から 5、6 人の作家や評論家が、そして日本側からは主に「千年紀文学」に属している人たちが参加され、「在日」の立場から梁石日(ヤン ソギル)さんなど

Rikkyo American Studies 21 (March 1999)
Copyright © 1999 The Institute for American Studies, Rikkyo University

何人かが参加していたのです。私は特にそこで講演をするとかシンポジウムに参加するとかではなく、ただ聴衆のひとりとして参加したわけなんですよ。私が年長になるからか、「後で挨拶くらいひとつやってくれ」というので挨拶だけを簡単にしようと思っていました。シンポジウムでは「日本と韓国から見た在日朝鮮人文学」というテーマで、双方からそれぞれ報告・発表があったのですけれども、韓国の大学で先生をやっている方、評論家なんですが、そのうちのひとりが韓国側から在日朝鮮人文学をどのようにみているかということを報告しまして、そしておしまいの方にですね、「それは韓国文学に属するのか、属しないのか」という難しい問題について意見を述べました。「日本語で書かれているから韓国文学ではない」と排外的なことを主張する人たちがいること、つまり韓国語で韓国人が書いたものが韓国文学という、いわば属文主義の見解です。もう一つは血統属地主義ですね。韓国人が書いたからといってそのまま韓国文学に入れるのも具合が悪いと。文学史と批評の協力によって言語、内容などを綜合的に検討を重ねながら取捨選択の過程を踏む……、というようなことを話しました。取捨選択ということは気に入らなかった。たとえそうであっても、カチンと来たのでした。

それで聞き終わってから、私は韓国側の代表に「「在日」の小説書きが、ここに何人か参加しているけれども、われわれはいったい何なのか。どういう立場で在日朝鮮人をみているのか。韓国側からは韓国文学に編入するとか、日本側からは日本文学だとか、いま日本と韓国の間に立っていて、まるで被告席に座らされているみたいな感じがする」とやや声高に言ってしまったんです。それは主に韓国側の発表に対してのものですが、そういうことがあって、在日朝鮮人文学とは何かともう一度考え始めたんですよ。今日は、現在の私がみている在日朝鮮人文学を、「国境を超える」、越境、日本における「在日」の国籍の問題などに結び付けて、お話したいと思います。

一般に日本の文壇の見方は、「在日朝鮮人文学は日本文学」というものでした。私は 1970 年代初期に「在日朝鮮人文学は日本文学でない、日本語文学である」というような評論を書いたりしたんです。かなり感情的に反発する人も多かったんですが、そのうちに私も忙しいし、ともかく私は評論家じゃない、書く立場ですから、作品を作り上げることが大事なわけでして。いまでも日本語文学という言葉は使われておりますが、私の関心はそこからかなり離れました。いま改めて

私は 1970 年代初期に「日本文学でない、日本語文学である」と主張していたことを思い返しているんですよ。

最近「ディアスポラ」という言葉がよく使われているようですけれども、「ディアスポラ」というのはもともとユダヤ人の代名詞でありまして、2000 年来の歴史があるんですが、このごろは「越境者」や「越境的なこと」に対して「ディアスポラ」がよく使われるようです。在日朝鮮人はこの新しい横文字の表現で言うと「ディアスポラ」なんですよ。「ディアスポラ」の背景には、自らすすんで移民するというのではなく、いろんな権力、政治的な抑圧がある。ユダヤの場合は、国がローマに滅ぼされて散り散りになってから 2000 年が経つわけですけれども、「在日」は日本の帝国主義によって結局「ディアスポラ」の運命に追い込まれた。中国にいま 200 万人くらい、世界に 500 万人くらいの朝鮮人がおります。すべて日本の帝国主義が原因というわけではありませんがね。特に在日朝鮮人の場合に限っていえば、戦時中は 160 万人の強制連行があったわけですが、それだけを取ってみても在日朝鮮人は「ディアスポラ」以外のものではありません。

「ディアスポラ」であるわれわれが作る文学は、「ディアスポラ」による文学なんです。日本文学と同じものは何かというと、言語なんですよ。いまでも日本の文壇ではこの属文主義のもとで「在日朝鮮人文学は日本文学だ」ということになっています。そして初期の在日朝鮮人文学の場合は日本文学の主流である私小説の影響が非常に大きい。手法的にも日本の主流文学の流れの一つになっている。そのように、在日朝鮮人文学は日本文学であるということが疑いなしにずっと長い間続いてきました。しかし最近は、皆様もご存知のように、リービ英雄とか在日朝鮮人以外に日本語で小説を書く人が現れております。

すると、言語ですね。文学は言語というひとつの条件だけで成立するものじゃないわけですよ。特に文学というものはあらゆるものが含まれるわけです。文学の中には、哲学も入ればいろんな思想的なものも入ってきます。また、言語以外の、あるいは言語以上のいろんな文化的な要素というものが文学の中に入っている。言語というのは、極端な言い方をすればひとつの伝達表現の方法です。ただし一つの言語が単に形式、表現の方法にすぎないということではありません。他方、言語自体の法則、合目的性といったようなものもあるわけです。言語は目的性を持ったいきものでして、したがってそれが単なる伝達方法ではなく、作家

主体と衝突を起こしたりもします。しかし、文学というものはまた、言語だけで成り立っているものではないということです。

「在日朝鮮人文学が日本文学だ」という発想は、言語属文主義なんですよ。言語以外に文学を律するものはないということです。そういうことは全然ありません。最新の『地と骨』がベストセラーになって多くの人に読まれている梁石日さんの作品――言語以外のいろんな要素によって成り立っている小説・文学を、どのように規定するかということです。たとえば、自分の作品をここへ持ち出して恐縮ですけれども、『火山島』という、朝鮮半島の南端の済州島で 1948 年 4 月 3 日に起こった「四・三事件」を歴史的背景にして書いている 10000 枚を超える長編――日本語で書かれているこの作品が日本文学の範疇に入るのか。日本文学の範疇から除けなさいというのではないのですよ。違うということを見なければいけない。日本語文学の世界というものは一つの宇宙、全体ですね。従来の日本人作家によって書かれた日本文学だけでない、もっと広い、大きい日本語文学、何か別の概念があってもいいんですよ。日本文学に吸収・同化するんではなく、全体として拡散すること。そうでないと、文学のもっているいろんな要素を見落としやすいということ、そういう視点が必要ではないかということです。すると在日朝鮮人文学とはいったい何か。日本文学でもなければ、韓国から来た文学者が指摘するようにいわゆる韓国文学、つまり朝鮮文学でもない。とすると、在日朝鮮人によって作られた文学だから在日朝鮮人文学だという言い方で在日朝鮮人文学の実体・その存在を解明できるわけではないのですよ。いろいろな分析が必要なんですけれども、いずれにしても、完全に「ディアスポラ」的な性格を持った文学ですね。「ディアスポラ」といえば何か横文字でかっこいいような感じですけれども、結局は、離散、追放、あるいは連行された、そういう被圧迫者ですね。日本語、いわば他国語のなかに表現を見出している存在。そういう存在から生まれてきた文学です。それは言語の条件だけで規定されるものではありません。

歴史は 50 年以上前の日本帝国主義時代に遡ってゆくわけですけれども、いずれにしても、われわれは、力によって、権力・政治によって越境させられた存在です。既に私たちが存在していること、その子供たちも全部含めて在日朝鮮人が存在していること、そして一世、二世、三世、四世までいるわけですけれど、彼らは朝鮮の故郷、父祖たちの故郷を知らないということ。ユダヤの場合は 2000

年ですよ。われわれの場合はまだ 100 年にならない。しかし「ディアスポラ」には違いない。幅と深さは全然違いますがね。そう考えると、在日朝鮮人文学というものには、二重性があるということです。トランスナショナルという言葉がありますけれども、在日朝鮮人文学自体が越境的な存在ですね。だから、在日朝鮮人文学というのが日本語では表現されていますけれども、日本の社会、あるいは日本の文学の世界の中で、それが目の前に存在しているということをどのようにこれから見るかということ、多角的にですね。極端にいえば、日本文学というのは支配者側なんですよ。明治以来の伝統があるわけです。そこから一方的に在日朝鮮人文学というものを日本文学が、日本の文壇が、吸収する立場でみてきたわけです。しかしたとえば、私の『火山島』という膨大な作品というものを日本文学の中に吸収できるでしょうか。これは不可能なんですよ。『火山島』は日本文学か。それなら、それはなぜか。『火山島』が日本文学である所以は日本語で書かれているから。答えはそれだけ。この場合、日本文学とは何か、何をもって日本文学とするかという、日本文学の概念の見直しが必要になるのではないか。いずれにしても、『火山島』という作品を黙殺して無視しない限りは、「日本語文学」というのは日本社会にはないんだということをしない限りは、それは一つの存在として目の前にあるわけです。それをどういう角度で見るかとなると、これまでの日本文学という視点からでは正体を見ることはできない。だから、日本文学の中に入るのがいやだとか、そういうことではなくて、目の前にある一つの存在について、いままでのような見方では実体を把握できないということを最近改めて考えるようになりました。

□ 国籍

私は「朝鮮」籍なんです。日本には「朝鮮」籍と韓国籍がありますが、韓国籍というのは国籍なんですね。法的にちゃんと認められた韓国国民のひとりなんです。「朝鮮」籍というのは、日本と北朝鮮の国交がないものだから、「朝鮮」という一つの記号なんです。「朝鮮」籍でありながら北朝鮮を支持する人とそうでない人がいるわけです。北朝鮮と日本が国交正常化した場合に、日本における「朝鮮」籍は自動的に「北」、朝鮮民主主義人民共和国籍に移るようになっておりま

す。個人の意思で選択はなされますが、自動的というよりも半分は強制的に「北」の共和国の国籍になっていくという政策を日本政府が取ると思うんですが、その場合に「朝鮮」籍でありながら「北」の国籍を取らない存在が日本に生まれてきます。何千人になるか何万人になるかわかりませんが、たとえば私でしたら、私は北朝鮮の国籍は取らない。「朝鮮」の籍のままですね。韓国籍も取りません。日本籍も取らない。その場合にどうなるか。完全に無国籍の状態が生まれてきます。この場合に、たとえばニューカマーという最近日本に入ってきた人たちと違って、在日朝鮮人の場合は、既に帝国主義時代に「ディアスポラ」のかたちで日本に渡ってきているわけです。それが、朝鮮が、祖国が、戦後独立したはずなのに分断状態が続いて、そして日本では挙げ句の果てに「新しいディアスポラ」という存在が生まれるというかなり深刻な事態がいまからはっきりと予測されるわけです。これは、私たち「在日」、新しい少数者だけでなく、日本にとっても国内のエアポケットとして、国際的に大きな問題を孕むことになると思います。

そして、討論の過程で機会がありましたならお話しますが、たとえば、最近私は、自分の作品『火山島』について初めて「亡命者文学」という言い方をしました。結局は南北朝鮮にも受け容れられない。私は戦後日本に来たんじゃないんですよ。日本で生まれて、それからずっと長い間日本に住んできました。もちろん、戦前から朝鮮への往来はしておりますけれども。そういう「在日」から見て、果たして「亡命者文学」とは何なのか、そのような自分自身のことも私は最近考えたりしております。

あとで、皆さんと討論のときに話を続けたいと思います。

＊　＊　＊

金石範氏の発言を一部修正し、加筆して掲載しました。なお、編集にあたって小見出しを付けました。（平塚）

＊　＊　＊

質疑応答

講演者三者への質問と応答が交互になされましたが、質問・応答ともに関連のある場合が多いこと、及び誌面の関係上、質問については特に金石範氏へのものを 4 点に短く要約しました。また、応答については金石範氏からのいくつかの応答からテーマごとに編集し、その原稿をもとに同氏が加筆しました。(平塚)

質問

1. なぜ朝鮮語で書かないで、日本語で書くのか。——言語の問題。韓国・朝鮮の言葉、朝鮮語で書こうという気が起こらなかったのか。もとの国の言葉に対する感情。朝鮮語に対するこだわり。
2. 帰化の問題。——人間として生きていくには衣・食・住が前提になる。帰化という方法もある。
3. オールドカマーとニューカマーの「在日」における葛藤。
4. 歴史認識と今後。——差別などはあると思うが、「在日」の人がやたらに意識しているところがあると思う。「郷に入らば郷に従え」。歴史は歴史である程度認識して、個人的な問題を重視していたら国としてやっていけない。これからどうやったらアジアの中で日本と韓国が上手くやっていけるのか。

応答

□ 朝鮮人である私が日本語で書くということ

簡単で、かつ複雑なんですね。私は 1960 年代にしばらく朝鮮語で書いておりました。現在書いている日本語のようには書けませんね。私は 73 歳ですが、70 年近い間日本に住んでおりますし、いまでも 2、3 年、韓国なら韓国、ソウルならソウルに行って住めば、向こうにいる人たちにそう劣らずに書く自信はあります。

『火山島』の原形は約 500 枚前後で、1965 年から 66 年にかけて朝鮮語で書かれたものであります。その時はまだある組織におりました。その組織が出す朝鮮語の文学雑誌を私が編集しておりました。その組織を出ると、実際に朝鮮語で書

くということには難しい現実があります。朝鮮語で書いて発表できるところはほとんどありません。私は職業作家ですから、原稿を書いてそれで生活をしなければいけない。同人雑誌を出して、細々と商売でもやりながら朝鮮語で書くなら別なんですけれども、そういうことは不可能であった。亡くなられました「在日」の金達寿（キム ダルス）さんを含めて「在日」の作家で朝鮮語で書けるというのはほとんど私ひとりという状態だったわけです。1957 年に『鴉の死』という短編を同人雑誌に発表しておりますが、それも「四・三事件」に関する『火山島』の原形をなすものです。それから 10 年ほど、私は日本語で書いていないんです。そういうプロセスがありまして、1970 年代頃から日本語で書くにあたって、なぜいったん捨てたはずの日本語で書くのかという疑問が自分自身に提起されて、言葉の問題で私はかなり苦しみました。

言葉の問題、言葉と作家の自由という問題、私の場合は具体的に日本語の問題なんです。私の書く作品の言葉の問題は、いったん朝鮮語で書いたものを日本語に翻訳するというようなことではないんです。頭の中での日本語と朝鮮語との葛藤などからくる操作はありますよ。日本語で表現できないものは、向こうを、朝鮮なら朝鮮、済州島を舞台にして向こうの風俗とか、またいろいろな会話を書く場合には、本当に日本語で出てこないことがいっぱいあります。それはいつも頭の中でいろんな葛藤を経てですね、そして出てくるんですが、しかしそれは翻訳をしているわけではない。現実に書かれた作品というものは、言葉というのは、私の体を通るものですよ、頭じゃないですね。私の体内を通過して、そして生まれた日本語です。

その場合に日本語の持っている魔術的とまではいかなくても言葉の呪縛ということがある。言葉には必ず、使う人、作家を呪縛するものがありますよね。普通一般の作家でも言葉の呪縛との葛藤があるんですが、私の場合は日本語という、私たちの年代からすれば、いわば敵性言語です。言葉の呪縛というその「呪縛」の意味はですね、一つは倫理的な側面と一つは論理的な側面なんですよ。倫理的というのは、かつての支配者の言葉で、自分が文学と人間の根源的なところまで入っていかなければならない。評論の文体とは違いますからね、その言葉は。論理的側面というのは、言葉の持っている言語機能なんです。他の国の言葉が持っていない、日本語なら日本語自体が持っている言語の一つの機能・拘束力という

ものなんですよ。具体的なもの、個別的なものですね、文字の形とか音とかもそうなります。日本語の個別的なもの、目的性、いきものとしての言葉です。それはある意味ではしゃべる人間、使う人間に自由をもたらすけれども、常にしゃべる人、書く人を拘束している。常識的な言葉も一つの言葉だけれども、新しい言葉・新しいものを発見して書こうとする場合、作家は必ずその常識的、一般的な言葉と葛藤を起こします。作家がその一般的な言葉、それによって起こる考えや感情などに順応しない限り、それは拘束力になってくるわけです。それが、私の場合は、日本語という敵性を持った言葉で自分が書かなければいけないという倫理的な側面と、もともと日本語という個別的な言語が持っているところの、書く人間、作家に対する拘束力の二つのものを、私の場合は言葉の呪縛として受けとめました。そして言語と自由。作家にとって言語はどのように自由であるべきかということを最初の頃は書いたりしました。

言葉の持っている個別的なものが大事なんですね。日本語本来の美しい面と同時に言葉というのは常に発展する、言葉には、個別的な側面だけではなくて普遍的な側面があるわけです。明治以降の日本語というのは、西洋の言葉をたくさん入れて、翻訳をして日本語化していますから、言葉自体が非常に国際化されていて、日本語が普遍性を帯びている。言葉の持っている普遍的な側面と個別的な側面の兼ね合い。だから私が越境するというのは、日本語が持っている呪縛力と同時に、日本語が日本語なりに持っている美しさと機能、そこを無視するわけにはいかないけれども、そこにはあまり足を取られないで超えるということ。日本語の個別性を日本語自身の内在する普遍性で超えるということです。

日本語が持っている言語としての普遍性とは何か。普遍性というものを通して、私は物書きとしての自由をいま獲得していると思うわけです。それは、簡単に言えば、想像力ですね、イマジネーションを通して日本語の持っている個別的なものを普遍化していくという操作が為されていくわけなんです。そういう意味で、私は日本人作家ではありませんからね、私が「在日」作家であること、個別性というのは作家にとって非常に大事なこと、基本なんですよ。個別的であって、どうやって「個」を乗り超えるか。すべての芸術がそうです。科学と違うわけでしてね。特に私のような場合は、日本の一般的な作家じゃなくて、在日朝鮮人であるという二重の矛盾の中にいるわけですから、この私が、どのように呪縛から離

れて作家としての自由を自分で勝ち獲るか。それは結局、作品の持っている普遍性なんです。

どのようにして作品の普遍性に至るのか。自分としては、日本語の持っている普遍的な側面を十分に意識して使っているわけではない、計算して使えるものじゃない。しかし言語にはそのような機能があるわけで、いわば無意識のうちに使われているわけです。たとえば朝鮮語を全く知らない青年が、少年が、自分が朝鮮人であるという民族意識を日本語でもって自分のものにするということがあるわけですよ。普遍的な認識能力とかがありうるわけです。それには概念的な面と感性的な面がありますけれど。日本語の持っている壁、音、形、その他の個性的な特性以外の、その言葉がどこか透明なところを通過しないものであるなら、日本語でもって「在日」の朝鮮人の若い人たちが、朝鮮の民族意識を持っていけないんです。言葉というのは閉鎖的なものではないということです。以前は日本語は日本人だけのものだということがあったわけですが、そういうものじゃない。言語は開かれていく、言語は個別性に留まるものではない。そういうことから、朝鮮を舞台にして向こうに住んでいる朝鮮人を登場させても、自分は日本語で作品を書けるという見通しがついて、それで、1970 年代から日本語で書き始めたわけです。そして現在まで続いている。

『火山島』という作品を書き上げて思うのは、日本語で書かれたものであるが、これが果たして日本文学かどうか、自分自身疑問なんです。もうちょっと時間が経てば日本文学というものの枠、日本語で書いたから日本文学だという枠組み、それも崩れていくんじゃないでしょうかね。何も日本文学だといわれるのがいやだというもんじゃなくてね、日本文学という枠を超える視点が必要ということです。いままではそれがなかった。在日朝鮮人文学を日本文学のひとつにして吸収してあげるとかいうことだけで。梁石日（ヤン ソギル）さんの話なんですが、彼の発言の中に、韓国へ行ったときに、自分の作品を翻訳したものを特殊な韓国文学として迎え入れるといわれて、非常に気分を悪くした。どこにも属さない。「在日」文学は地域性を超えてアジアへ、世界へとつながっていくポジションだと話していました。これは文学の超越性と指摘したものです。

「韓国―在日―日本」でしょ。結局私はその間に挟まれているようで、さっきもお話したんですが、「日韓文学者シンポジウム」では被告席に立たされている

ような感じがしたんです。恐らくこういうことをやりだしたら面倒なんです。日本語文学のなかの在日朝鮮人文学、日本語文学としての在日朝鮮人文学などとね。しかし、いずれ必要になる。日本文学の枠組みもこれからかなり崩れてゆくと思うんです。それはいい意味でです。これから朝鮮語で書くといっても余力もありませんし、あと、物書きとして余力があれば、懸命に、日本語でですね、日本語で私の肉体、体内を通して、その言葉で書いていく。その言葉自体に普遍性があると思っているんです。

□ 帰化

難しいんですよねえ。ただ一つ言えることは、何十年も住んでいながら、その何十万人もの人間がその土地に帰化しないというのは、世界で在日朝鮮人だけではないかと思います。他はだいたい、自分が住んでいるところで国籍を取りますよね。アメリカにはいま 100 万人以上の韓国人がいて、ほとんどがグリーンカードとかアメリカの国籍を取っているわけです。中国では中国国民です。約 200 万人の朝鮮族の自治区があって、朝鮮語で教育をし、そして朝鮮語の大学へ進む。民族教育というのは中国の国家で義務づけられているのですよ。海外へ行きますと、日本に住んでいて日本の国籍でないというのは、必ず不思議がられるということですね。大体、国籍原理が生地主義ですから、10 年も 20 年も住めば日本の国籍を取って日本のパスポートを手に来るべきであるのにそうじゃない。世界でも珍しいんですね、在日朝鮮人の存在は。

日本ではなぜ在日朝鮮人はなかなか帰化しないか。それをお話すると非常に長くなります。歴史的背景がある。それは日本の差別構造が普通でなかったということが原因。帰化した方が便利ですよね、生活するために。帰化する場合でも、子供に在日朝鮮人としての苦労、差別とかをさせないためにですよ、親の方から子供の知らない間に帰化している。たとえば数年前に亡くなった芥川賞受賞の李良枝（リ ヤンジ）という女性作家、彼女も自分の知らない間に親が帰化していたんですよ。両親だけでなくて、娘をも子供のときに帰化させていた。ところが高校に上がって自分が朝鮮人であることをはじめて知るわけです。それからいわゆる日本人でない存在、在日朝鮮人とは何か、自分のアイデンティティは何かということで、彼

女の存在は分裂しはじめ、苦しみ、そして彼女は小説を書き出すことになった。

いまは昔と違って目に見えないようですけど、そういうものがその人間の「俺は朝鮮人だ」、「俺は日本人でない」というね、このごろの言い方ですればアイデンティティというものを、個人に自発的にというよりもですね、歴史的な状況がその人間を朝鮮人に作っていくということがあります。あるいは、自分を殺して、つまり朝鮮人である自分を隠して日本人になりきっていく。帰化する場合もありますけれども、若い世代が若いなりに自分は在日朝鮮人として生きていくという考えの者も非常に多い。これだけでも研究の対象になりますけどね。まあ、あまり帰化しないですね、若い人は。だから、国籍は韓国であっても、朝鮮であっても関係ないという人も多い。しかし、日本の国籍は取らない。取った方が生活にも便利がいいしねえ。取らないといろんな面で不便なんだけれども。

□ 通過点としての「国民国家」・近代国家

私は日本の友人に「金さんは民族主義者だ」とよく言われるんです。日本で民族主義というと、あまり良い響きではないですね、マイナスになるのも知っています。でも、そうだと答えるんです。活字にもしてますよ、私は民族主義者であると。自分ではインターナショナリストというつもりもあります。かつて若いころですが日本の共産党にも入ったことがありますし、革命家のつもりで運動をしたこともあります。決して民族主義的だというわけでもないんですけれども、これにはまだ解放されていない民族だという条件があるんですね。

それで、インターナショナリズム。社会主義が崩壊していないときはですね、ナショナルなものを超える普遍的な原理みたいなもの、たとえば世界解放の担い手であるプロレタリア階級とか、イデオロギーとか、民族的なものを超越できるようなものがありました。いまはそれがないんです。そういうかつてのインターナショナリズムに代わり得る社会的な背景のある普遍的な理念がありうるか。それはないんじゃないかと思います。それがひとつ。

それから、たとえばアイザック・ドイッチャーは、「他国の支配下にある民族にとって独立の国家体制は絶対的必要条件であり、一つの進歩を意味する。しかし一たびその民族が独立の段階に達した瞬間に、そこに心を固定し、それ以上の

ところをみようろしなくなることは、その民族の退歩以外のなにものでもない。しいたげられた民族のナショナリズムはそれなりの正当性をもつが、主権を獲得した国民が同じくそのナショナリズムの正当性を求めることはできないのである。」(『非ユダヤ的ユダヤ人』159 頁) ということを書いている。かつての日帝時代の朝鮮人の共産主義者はもちろん階級的立場でインターナショナリズムを志向しているけれども、まずそのためには朝鮮を独立させて解放しなければならない。その限りにおいて朝鮮の共産主義者は、コスモポリタンではなくて、ナショナリストなんです。民族解放と国際的な連体、いわゆるプロレタリアを通しての全体＝インターナショナルとどう結び付けるか。

日本のナショナリズムの場合は、結局、帝国主義なんです。これとかつての植民地から自ら解放するナショナリズムとを一緒にしてはいけないんです。たとえば、「国民国家」というのはいわば 19 世紀の遺産ですよね。日本だって天皇制を固めてですね、西洋流の「国民国家」というものを作って、やりたいことをやってきたわけなんですよ。私は決して国家というものを本質的にはいいとは思っていないですよ。支配／被支配の、抑圧装置の機構ですから。民主化されていない国家は権力を合法化する弾圧装置であって、権力をもって人間を非人間的に、いや、国家の名で合法的に殺すこともできるし、それを国家はやってきた。これは破壊しなければならない。しかし封建社会から「国民国家」・近代国家への脱皮、統一と形成は必要だった。と同時にね、その恐ろしい民族国家の狂気を、ナチス・ドイツや戦前の日本の場合のようにわれわれは見てきたわけですよ。ただ、朝鮮の場合は近代国家、「国民国家」というものを経験したことがないのですよ。だから、仮りにデモクラシー、民主主義を実現するにしてもですね、やはり近代国家というのは必要なんです。朝鮮の場合は南北統一をして「国民国家」ができるんですよ。その国民の中には朝鮮人だけでなくてもいいわけなんですから。「国民国家」というものを作らないと、民主主義的制度を実現できない。そうすると、社会が、朝鮮の統一国家がインターナショナリズムに通じるのはどこか。人権、個人の自由に基礎を置いた民主主義、これがナショナルを超えたものを実現するしかないんです。これを私は別の革命と思っているわけです。もちろん、思想としてつねにそのプロセスにおいて民族を超える、今日のテーマが「越境」ですけれども、インターナショナルへ向かうんです。

民主主義を実現した先進国がたくさんあるじゃないですか。アメリカがそうであり、ヨーロッパはいまは連合を作ってね。ユーロ統一通貨圏が実現する。すばらしいことだと思うのですけど、民族主義を超越して国家を解体するためには朝鮮の場合、一応は統一国家を、朝鮮半島における国家というものを形成する必要がある。そこで民主主義を実現していく。その時日本はどんなにすばらしい国になっているか分かりませんよ。そういうプロセスがないのに、いま国家の枠を外してみてごらんなさい。国家の持っている悪、これはどんなにいい社会になっても、いわゆる弾圧という性格は権力構造である限りは、あるわけですからね、どのようにして排除していくか。必要悪として、朝鮮の場合は南北統一で一つの「国民国家」を、近代国家を、です。もう 21 世紀になるけれども、朝鮮に近代国家なんてないじゃないですか。それを主張すると民族主義と言われるが、そうじゃないわけです。インターナショナリズムを実行するなら、まず 19 世紀に近代国家を形成した先進国家から国家を解体する。その以前に国家の統制を崩していく。ところが、まだ国家も作ったこともない、これから作ってみようというところに対して、先進国におけるような一般的なインターナショナリズム、国家解体を唱える。そのためには、後進的な「国民国家」における民主主義的普遍性の実現が伴わないといけません。

□ 歴史的背景

われわれ在日朝鮮人というのは他者の歴史を生きてきた存在です。われわれの歴史を生きてきたんじゃない。自分たちの歴史を全部抹殺され、あるいは残った分も捻じ曲げられて、日本帝国の、日本の奴隷の歴史として書き換えられた。だから、われわれは他者の歴史のなかの他者であってはならないわけだ。日本人は、われわれをして、他者たらしめた。自分たちの歴史の中でわれわれを生かした、在日朝鮮人を。われわれはいかに自分を生きなければいけないということですよ。それには歴史的な背景があるんです。

日本が戦後の責任をもつということはね、たんなる戦争責任ではなくて、これは人間の問題なんだ。自分たちが支配し、相手の自分というものを否定し、他者たらしめたところからね、人間的に責任をもたなければいけない。日本の政府は

責任をもたないから、われわれは他者的な存在から自分の存在になるために、在日朝鮮人はやってきている。それを常に意識させるものが、日本の差別とかいろんなことなんだ。何十年も日本に生きて、日本の国籍を取らないなんて、そんな馬鹿がどこにいますか。日本人はやっぱり分からないんだ、これが。冗談ですが、日本から天皇制がなくなれば私も帰化いたしますよ。そのとき私は世の中にいませんけれども。天皇がシンボルと言うけれど、われわれにしてみれば昔から同じですよ。戦後もあの体制の上に立ったものが続いているわけだ。そういうところを考えるとね、素晴らしい若い学者たちがいらしゃるんだけれども、なぜ日本で、日本の天皇制を廃止するための論議がね、実際に廃止されなくてもいいけれども、徹底して行われないのか。そのように過去を引き摺ったものがあるんです、日の丸もそうだけども。小学生を教える学校まで日の丸ね。君が代もそうですよ。昔のドイツでもイタリアでも、ファシズムの国家は全部国旗を変えているわけだ。いっしょになれと言っているわけではないんだけれどもね。すんなり、日本では戦前のものがみな入ってくるわけだ。だから、戦後の在日朝鮮人を他者たらしめている歴史がそのまま残っているということなんだ。

われわれはわれわれの歴史を生きたいわけだ。日本人は生きてきたじゃないか。自分自身として生きてきたんじゃなくて、われわれを他者たらしめる支配者として生きてきた。歴史を見ると、他者たらしめるということは相手の存在は認めないということなんですよ。自分たちだけに歴史がある。その延長戦上にあるのが自由主義史観ですがね。世の中に考えがいろいろあってもいいけどね、私は朝鮮人ながら恥ずかしい。ああいう考えを持っている連中は、いつでも他の人間を、いわゆる日本の歴史で自分以外を他者たらしめている、他者たらしめうる存在なんです。自分が他者となって自分のところに戻ってこないわけです。冗談半分ですけど、他の歴史のもとに他者にいっぺんなってみなければならない、ああいう人たちは。日本は戦後アメリカの占領下にあったというかもしれない。それで日本はアメリカの他者の歴史を生きただろうか。その構造のなかで、なお在日朝鮮人を他者たらしめてきたわけです。これは帝国主義支配、戦争責任の問題です。戦後徹底的に、根底からですね、歴史的な反省があったでしょうか。できなかったのは、日本の知識人の先輩たちの責任だ。そのように、日本の歴史認識自体がいまでも曲がって、まともじゃないということ。まともに歴史的な立場に立って

いる学者たちはいますし、そのたたかいもずっと続いているけれどもね、それが日本人の意識には定着していない。そういう中にわれわれ在日朝鮮人は生きている。朝鮮人で生きる。これは民族主義じゃないんだ。人間が自由に生きたい、他者でなく自分を生きるということ。日本人だって自由に生きてやっているじゃないですか。われわれが自由に生きるっていうことは、朝鮮人としてまともに生きることなんだ。それをさせない、日本の社会は。

これはすべて朝鮮人の個人の問題じゃないの。最後に決めるのは個人の問題ではあるけれども。他者の歴史を生きてきた在日朝鮮人の歴史なんですよ。その歴史のおおもとはどこか。日本の帝国主義じゃないですか。それをいまになって忘れているとは。いまも残っているんだ。日本と朝鮮との不幸な関係はもう一世紀近くなるわけなんですね。しかし、日本みたいに責任を取らない国は珍しい。どこにその原因があるんだと考える。戦後に、憲法の問題を含めて、知識人たちのいろんな論争がありますよ。それが決定的になされていれば、加藤典洋がいまごろ 50 年後に、若い人がね、その内容はさておいて『敗戦後論』を書く必要はないんだと思う。その意味で、私は加藤典洋がああいうことを書いたという、努力というかね、それに私は敬意を表するんです。先輩がやっていないんだ、日本の知識人たちが、何も。戦後生まれのね、彼にそういうことを書かせてね。これは日本の過去の歴史の原罪性を示しているんですよ、加藤典洋が『敗戦後論』を書くというのは。■

＊　＊　＊

採録は立教大学大学院比較文明学専攻の平塚毅がおこない、その後、報告者本人が加筆・修正をほどこした。